

2016年度 名古屋大学 前期 国語

一 評論

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★☆☆	45分	山極壽一『負けない構えの美しさをゴリラから学ぶ』からの出題。山極壽一は人類学者・霊長類学者でゴリラ研究の第一人者である。『ゴリラとヒトの間』父という余分なもの―サルに探る文明の起源』など数多くの著書をもつ。また京都大学大学院理学研究科教授であり、京都大学の現総長でもある。	難しい日本語が使われている箇所もなく非常に読みやすい文章であったろう。例年通り客観問題と記述問題が織り交ぜられており、総合的な国語力が求められた。それほど難解な問題はなく、どれだけ幅広い問題に取り組み、基礎力を養ってきたかが問われる問題であったろう。 問三は一見して単純な問題であるが、問に忠実に答える力が求められた。問五では人間の社会とゴリラの社会の(1)共通点・(2)相違点が問われたが、両者を比較しつつ読み進める力が求められた。また、問六では傍線部前に触れられている現代社会の問題点を把握したうえで本文全体から要素を

傾向と対策

拾う必要がある、全体を俯瞰する読解力が必要とされた。ゴリラとサルの社会の比較、現代社会との差異を理解して書くことが重要であり、違いを把握しつつ読み進める力が問われただろう。

例年、本文の流れに沿って忠実に読み進めれば解答をつくるのは難しくない問題が出題されており、基礎力がものをいう大学といえる。幅広い問題に触れ、確実に基礎的な問題を解けるように演習すべきである。

解答

- 問一 a 鋭 b カ c ボウゼン d 膨 e 興奮 f 採食
g フル h 徹底 i クップク j ウト
- 問二 A イ B カ C エ
- 問三 サルのルールと同じく、見返すことで挑戦したと受け取られ、ゴリラに攻撃されるのを防ごうと考えたから。(49字)
- 問四 ア・ウ・エ
- 問五 (1) 強さによって優劣は決まらず、問題を勝敗ではなく第三者の仲裁により解決することで対等性を維持する点。(49字)
(2) ゴリラが優劣関係を認識せず、徹底的に対等性にこだわるのに対し、人間は優劣関係を認識し、相手より優位に立ちたいという気持ちを持っている点。(68字)
- 問六 勝敗をつけることでトラブルを解決し、相手を押しつけることで孤立するのではなく、互いに顔を合わせて暖かい関係を確かめ合い、トラ

ブルは仲間が機敏に反応して仲裁し、相手と対等な関係を維持することで平和がもたらされる社会。(107字)

本文解説

段落解説

I シリーとの遭遇(第1〜第3段落)

アフリカの赤道直下、ヴィルンガ火山群の山地林でマウンテンゴリラの観察をしていた筆者にシリーという若いオスのゴリラが近寄ってきた。野性ニホンザルの調査をしてきた筆者はサルに近づかれたらサルのルールに従って行動するという鉄則を守ってきた。ニホンザルの社会では相手を見つめるのは強いサルの特権であり、目を合わすことは強いサルへの挑戦と受け取られ攻撃されることになる。筆者はゴリラのシリーが近づいてきたときも、逆らうつもりがないことを表明すべく目を伏せた。シリーは筆者の前に止まると、恐怖に駆られて横を向く筆者の正面からしばらく筆者の顔をのぞきこみ、低い声でうなり胸を打って遠ざかって行った。

II ゴリラの社会性(第4〜第8段落)

突然とシリーを見送った筆者はシリーの行動を自身が誤解したのではないかと考えた。筆者はゴリラどうしの行動を注意深く観察することとし、近づきあって顔を合わせるゴリラの行動が実は重要な機能を果たしていることに気づいた。ゴリラどうしが近づきあって顔を合わすことは、ゴリラのあいさつ、遊びの誘い、求愛、仲直り、けんかの仲裁などに用いられていたのだ。筆者はそのうちにこれがゴリラの社会性を表す典型的な構えであることに気づいた。常に自分と相手とどちらが強いかに認識し、仲間との競争を防ぐ

ためにあらかじめ優劣関係を作り弱いサルは自らの行動を抑制するニホンザルに対し、ゴリラは優劣関係を認識していない。体の大きなゴリラが顔をのぞきこんできても、小さいゴリラは劣位な態度を取らず、相手の顔をじつと見返すのだ。

ゴリラにはドラミングという両手の平で交互に胸をたたく動作が見られる。ゴリラ特有の遠距離コミュニケーションだ。長い間、これはゴリラの宣戦布告と見なされ、凶暴性を示す態度と考えられてきたが、戦いの合図ではないことが分かるようになった。ドラミングは遊びの合図や好奇心や興奮など、特定の相手に向けられないことも多い。

筆者は、若いシリーが大きなオスたちの間に割り込んでけんかを仲裁したことに驚いた。ニホンザルでは体の小さなものがけんかに介入すれば攻撃されて仲裁どころではない。ゴリラで仲裁が可能なのは体の大きさを優劣が決まらず、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていないからである。体の小さい仲裁者に従うことでけんかをせずにどちらもメンツを失わずに引き分けることができるのだ。つまり、群れ生活に平和と秩序をもたらすルルがニホンザルとゴリラとは違うのだ。ニホンザルは互いに優劣を認識し、勝ち負けをすぐに決めてトラブルを防ぐのに対し、ゴリラは勝ち負けを決めずに第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する。相手をのぞきこむ行動もドラミングも、こうしたゴリラの対等性を維持するために発達したに違いない。

III 人間とゴリラの社会性(第9・第10段落)

こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると、人間はサルではなく、ゴリラに近い社会性を持っているように見える。人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いの

メンツを保とうとする傾向が強いからだ。しかし、人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではなく、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている。ただ、自分が不利な状況に置かれたいようにそこには慎重な気配りが働いているのだ。ニホンザルのように勝利によって相手を屈服させ利益を独占することは、孤立という形での不利益につながるが、相手との対等な立場を目標とする「負けないでいようとする」姿勢は仲間を失わない。かえって仲良くなれるかもしれないが、常にトラブルが起こる危険が生じる。そのため仲裁者が必要とされるのだ。人間は対等であることに常に気を配りながら社会を作ってきたように思える。

IV 現代社会と対等性(第11・第12段落)

しかし現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているようにみえる。それは「負けまいとする態度」を「勝とうとする気持ち」に読み替えることによって加速している。サルとゴリラのようにこの2つははっきり違う社会性を作り出す。それを混同して同じものと見なすことで日本は競争社会を乗り切ろうとしている。これにより生じる孤立といった弊害を深刻化させる前に防ぐには人間社会の由来を考え直す必要がある。人間はゴリラと共通の祖先から対等性を重んじる社会を受け継ぎ、互いに静かに向き合う交渉を持つことでそれを維持してきた。IT技術は遠く離れていても会話や情報交換ができる機会を与えたが、人間の対等な社会性を保持する力を持っていない。人間が対等で平等な関係を保つためには、互いに顔を合わせる機会を多く持ちトラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計することが不可欠だ。それは、サルのように勝とうとするのではなく、ゴリラのように負けまいとすることを美德とする社会といえるだろう。

百字要旨

勝敗によってトラブルを解決し、人間の孤独が深まる現代の日本社会は、互いの対等性を重んじるゴリラの社会のように、直接的な交渉によってトラブルを仲裁し、相手と対等な立場を維持することの美德を見直すべきだ。

(100字)

用語解説

― 出典：『広辞苑 第六版』(岩波書店)

宣戦布告 他国に対し戦争に訴えることを宣言・公布すること。転じて、他

者に対して暴力に訴えることを伝えること。

専売特許 ある人が特に得意とする技術や技法。転じて、優れていて他には

真似できないこと、特徴。

機敏 時機に応じて心の働きや動作がすばやいこと。すばしこいこと。

設問解説

問一

解答 a 鋭 b カ c ボウゼン d 膨 e 興奮 f 採食

g フル h 徹底 i クップク j ウト

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 知識・教養

解説

例年通り漢字の読み書きの問題である。難しい漢字はないので全問正解してほしい。f 採食は馴染みのない語であったかもしれないが、「サイシヨク

の旅に出かけよう」という表現から「採食」をイメージできただろうか。一見して馴染みのない漢字でも文脈から意味を類推できれば答えられるものも多くあるので、簡単に諦めないようにしましょう。

問二

解答 A イ B カ C エ

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 I・II(第1～第8段落、特に第3・第4段落)

解説

接続詞を空欄に入れる問題である。接続詞は二文をその関係性を明確にしながらかつなく働きがある。そのため、こうした問題では二文の関係性に目を向けよう。

Aについてみていく。Aの直前の文では「目を伏せておく方が無難である」とあり、Aを含む文では「シリーズの方を見ないように目を伏せた」とあるため、目を伏せた理由がAの直前の文に表されていることがわかる。ここで選択肢に目をむければ、理由・根拠を表す接続詞はIの「だから」のみであるのでIが正解である。

Bについてみていく。Bの直前文では「私は逆らうつもりがないことを示すため、さらに横を向いた」とあり、Bを含む文では「シリーズは私の顔をじっと見つめたのである」とある。筆者の予想に反する結果が後者で表されていると考えればEの「でも」が、筆者の行動に対しシリーズの取った行動が表されていると考えればCの「すると」が正解になり得る。

Cに目を向けよう。「ゴリラどうしが近づきあって顔を合わす。」と「二本ザルや」ので、私は何か意味のある交渉をしたとは見なしてこなかった。」

の二文をCが繋いでいる。顔を合わせるといふ意味のありそうな行動を、意味のあるものと見ていなかった、とのことなので逆接である。逆接の接続詞はEの「でも」のみであり、Eが正解。消去法でBはCの「すると」が正解となる。

このように消去法でも解けるが、Eの「でも」をBに入れて文章を読めば違和感があるだろう。言葉への感覚も研ぎ澄ましてほしい。

問三

解答 サルのルールと同じく、見返すことで挑戦したと受け取られ、ゴリラ

に攻撃されるのを防ごうと考えたから。(49字)

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 要約型

解答範囲 I(第1段落～第3段落、特に第2段落)

解説

筆者がシリーズの方を見ないように目を伏せた理由が問われている。傍線部を含む一文に「ゴリラのシリーズが近づいてきたとき」とある。「も」と書いてあるので直前の第2段落に目を伏せる理由が書いてあるはずである。第2段落3・4文目に「弱いサルは強いサルに見つめられたら、決して見返してはいけない。目を合わすと挑戦したと受け取られ、強いサルから攻撃されることになるからだ」、7文目に「刺激しないようにそっと目を伏せておく方が無難である」とある。以上から、目を見返すことはサルのルールでは挑戦を意味すること、目を伏せるのは攻撃されるのを防ぐためであることがわかる。筆者はゴリラにもサルと同様のルールが当てはまるのではないかと思っただので、ゴリラのシリーズが近づいてきたときも同様の理由で目を伏せたのである。以上をまとめれば解答となる。

《解答要素》

- ① 「サルのルールと同じ」
 - ② 「見返すことは挑戦したと受け取られる」
 - ③ 「②によって攻撃されるのを防ぐ」
- ※解答は「くため。」「くから。」で締めること。

《参照箇所》

- ① 第3段落1文目
- ② 第2段落4文目
- ③ 第2段落4文目

問四

解答 ア・ウ・エ

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 特殊型

解答範囲 Ⅱ(第4～第8段落、特に第6段落)

解説

ドラミングに認められる機能が問われている。本文に明確に書かれているので読むだけで解ける問題である。間違えないようにしよう。

ドラミングについて書かれた段落は第6段落である。第6段落4文目から「これ(＝ドラミング)は長い間、ゴリラの宣戦布告と見なされ、ゴリラの凶暴性を示す態度と考えられてきた。くやっとドラミングが戦いの合図ではないことが分かるようになったのである。」とある。よって、イ「宣戦布告」・オ「凶暴性の誇示」・ク「戦いの手段」は不適切である。また、6～8文目に「ドラミングはオスの専売特許ではない。音は小さいが、メスも子供も胸をたたく。それは、遊びの合図だったり、好奇心や興奮だったり、不満の表

明だったり、自己主張だったりする。」とあるので、ア「不満の表明」・ウ「遊びの合図」・エ「興奮の発露」は適切である。カ「格好よく見せる演出」であるが本文にこのような機能は書かれていない。第6段落最終文に「とても格好良く見える。」とあるが、これは筆者の主観を述べたものでドラミングの機能ではないので注意しよう。キ「劣位な態度の表示」はドラミングの機能として書かれていないどころか、そもそも優劣を認識しないゴリラは劣位な態度の表示をしないので、不適切である。

問五

解答 (1) 強さによって優劣は決まらず、問題を勝敗ではなく第三者の仲裁

により解決することで対等性を維持する点。(49字)

(2) ゴリラが優劣関係を認識せず、徹底的に対等性にこだわるのに対し、人間は優劣関係を認識し、相手より優位に立ちたいという気持ちを持っている点。(68字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 Ⅱ(第4～第8段落)・Ⅲ(第9・第10段落)

解説

人間の社会とゴリラの社会の(1)共通点・(2)相違点がそれぞれ問われている。傍線部を含む一文に目を向ければ「こうしたニホンザルとゴリラの社会性を人間と比べてみると」とある。「こうしたくゴリラの社会性」と書いてあることからゴリラの社会性について前の段落までに触れられているはずである。

ゴリラの社会性とはどのようなものか(Ⅱ)を中心に見ていく。第5段落5文目に「ゴリラはサルのような優劣関係を認識していない」、7・8文目

に「子どものゴリラの10倍以上もある。でも、どんなに体の差があっても、小さいゴリラは劣位な態度を取らない」とある。また、同内容だが、第7段落5文目に「体の大きさに応じて優劣が決まっていけないことと、勝敗をつけることがトラブルの解決とされていないからである」とある。さらに第8段落3文目に「ゴリラは勝ち負けを決めずに、第三者が仲裁に入ることによって対等性を維持する」とある。以上からゴリラの社会性として、優劣関係を認識していないこと・強さによって優劣は決まらないこと・勝敗を決めずに第三者の仲裁により対等性を維持すること、が挙げられる。

求められているのは人間の社会性との比較であるので人間の社会性について(Ⅲ)を中心に見ていく。第9段落2文目に「子どものころから人間は負けず嫌いだし、トラブルを勝ち負けで解決するのではなく、第三者が仲裁して互いのメンツを保とうとする傾向が強い」とある。また、3・4文目に「しかし、人間はゴリラほど徹底的に対等性にこだわるわけではない。相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちも持っている」とある。さらに第10段落10文目に「ゴリラのように、自分より弱い仲裁者であっても言うことを聞いてメンツを保つ」とある。以上から人間の社会性として、強さに応じて優劣が決まっていけないこと・トラブルを勝敗ではなく、第三者の仲裁により解決すること・相手に勝ちたい、仲間より優位に立ちたいという気持ちを持つこと、が挙げられる。

最後にゴリラの社会と人間の社会の共通点・相違点をまとめれば解答となる。(1)共通点として、強さと優劣が関係ないこと・問題を勝敗ではなく第三者の仲裁により解決すること・対等性を重んじることが挙げられる。(2)相違点として、ゴリラは優劣関係を認識せず、対等性を徹底的に維持するのに対し、人間は優劣関係を認識し、相手に勝ちたいという気持ちを持つことが挙げられる。

《解答要素》

- (1) 「強さと優劣が関係ない」
- ① 「問題を勝敗ではなく第三者の仲裁により解決する」
- ② 「対等性を維持する(互いのメンツを保つ)」
- (2) 「ゴリラは優劣関係を認識しない」
- ① 「ゴリラは徹底的に対等性にこだわる」
- ② 「(①に比して) 人間は優劣関係を認識する」
- ③ 「(②に比して) 人間は相手より優位に立ちたいという気持ちを持つ」

《参照箇所》

- (1) 第7段落5文目
- ① 第8段落3文目
- ② 第8段落3文目(第9段落2文目)
- ③ 第5段落5文目
- (2) 第9段落3文目
- ① 第9段落4文目
- ② 第9段落4文目
- ③ 第9段落4文目
- ④ 第9段落4文目

問六

解答

勝敗をつけることでトラブルを解決し、相手を押しのけることで孤立するのではなく、互いに顔を合わせて暖かい関係を確かめ合い、トラ

ブルは仲間が機敏に反応して仲裁し、相手と対等な関係を維持することで平和がもたらされる社会。(107字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 要旨把握型

解答範囲 Ⅲ(第9・第10段落)・Ⅳ(第11・第12段落)

解説

「勝つ構えより、負けない構えの美しさを尊ぶ社会」とはどのような社会が問われている。傍線部を含む一文で「それは勝つ構えより、負けない構えの美しさを尊ぶ社会」と書かれているので、「それ」の内容を考える。直前の文に「人間が争わず、勝敗にこだわらず、対等で平等な関係を保つためには、互いに顔を合わせる機会を多く持ち、トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁するような暮らしを設計することが不可欠なのである」とあるので、「それ」の内容は上記のような社会とってよいだろう。

傍線部に注目して解答を作る。「勝つ構え」と「負けない構え」の対比を意識する。「勝つ構え」とは傍線部前文に書かれているような勝敗にこだわった姿勢である。第10段落1・2文目に「勝つことは相手を屈服させ、抑制させ、押しつけることを結果する。勝者と敗者は対等ではなく、勝者が利益を独り占めにする」とある。また第11段落1文目に「現代の社会は効率性を重視するあまり、勝敗をつけることでトラブルを解決する傾向を強めているように見える」とある。以上から、「勝つ構え」とはすなわち、勝敗をつけることでトラブルを解決し相手より優位に立とうとすること、といえる。また「勝つ構え」によってもたらされる社会とは、第11段落6・7文目に「不本意ながら勝利を手にした子どもたちは友達を失い、次第に孤独になっていく。ねたまれ、うらまれ、疎んじられていじめに会い、孤立していく」という具体例を用いて示されている。つまり、相手を屈服させるといふ形での勝利に

よって人々が孤立していく社会である。

次に「負けない構え」だが、それは傍線部直前文にあるように「対等で平等な関係を保つ」「トラブルに仲間が機敏に反応して仲裁する」姿勢である。また、「負けない構え」によってもたらされる社会とは、「友達を失わないし、かえって仲良くなれるかもしれない」社会である(第10段落5文目)。
また第12段落3・4文目「それ(＝対等性をより重んじる社会)は、互いに静かに向き合う交渉を持つことによって保たれてきた。人間らしい社会を作る上で、顔と顔を合せ、互いの暖かい関係を確かめ合うことはとても重要なコミュニケーションなのである」とあるように、「互いに顔を合わせて暖かい関係を確かめ合い」の部分は傍線部のような社会において不可欠な要素であるため必須である。また、第12段落5・6文目の現代社会における交渉との差を明確にする意味でも必要となる。

以上をまとめると上記のような解答となる。

《解答要素》

- ① 「勝敗をつけることでトラブルを解決する」
- ② 「相手を押しつける」
- ③ 「①②の結果、孤立する」
- ④ 「互いに顔を合わせて暖かい関係を確かめ合う」
- ⑤ 「①に比して」トラブルは第三者が仲裁する
- ⑥ 「②に比して」相手と対等な関係を維持する
- ⑦ 「③に比して」(⑤⑥の結果)平和がもたらされる

《参照箇所》

- ① 第11段落1文目
- ② 第10段落1文目

- ⑦ 第10段落5文目
- ⑥ 第12段落7文目
- ⑤ 第12段落7文目
- ④ 第12段落4文目
- ③ 第11段落7文目

(井小路馨、丸岡賢人、正木僚)

2016年度 名古屋大学 前期 国語

二 古文（今様集）

難易度	★★★★☆
所要時間	35分
出典	後白河院『梁塵秘抄』からの出題。平安時代末期、十二世紀後半に成立した今様集。歌謡を集めた歌詞集と、院の芸歴などを記した口伝集からなる。もとは二十巻であったが、歌詞集・口伝集ともにそのうちの二巻のみが現存している。後白河院は今様の熱心な愛好者である一方で、仏教の信仰も深かった。口伝集においても、今様に關する記録のほかに社寺参詣のエピソードなどが語られている。
傾向と対策	本文は単語・文法ともにやさしめの読みやすい文章である。今様の曲名や仏教用語の羅列には戸惑うかもしれないが、大意を把握することに努め、一つひとつの単語にこだわり過ぎなければ、スムーズな読解ができたであろう。あえて読みにくい点を挙げるとすれば、傍線部を中心にしばしば指示語・省略がみられることである。しかしそれらにしても、話の展開を追えていれば通読・精読を妨げるほどのものはなかった。 設問も、主語判定や現代語訳といった基本的なものばかり

傾向と対策

りで、頭を悩ませるような複雑な問題はみられない。古文単語の少なさは内容理解の重視の裏返しであり、記述問題に關しては、読解力を試すような、指示語の内容を説明させる問題の多さが目立つ。一番の難所は問四の心情説明問題で、指定された文字数の多さには面食らうかもしれない。しかし、本文前半の内容をおさえていれば解答の核となる部分は容易に特定できるはずである。

《この解説の使い方》

本文読解 「本文を読み始める前に」と「通読」からなる。古文の実力のある人が実際に本文を読むとき何を考えているか（「本文を読み始める前に」および「通読」の◎部分）や設問解説では述べられなかった重要なポイントなど（「通読」の★部分）について書いてある。どこに注意して本文を読めばいいかわからない人、本文を読むのに時間を使いすぎる人は、この項目を見てもみよう。

設問解説 設問ごとの詳細な解説を、古文が苦手な人にも思考の流れが十分に伝わるように書いてある。古文が苦手な人はまずは「合格答案」レベルの解答を、得意な人は「満点答案」を目指そう。

本文解説 「現代語訳」と「用語解説」からなる。「現代語訳」は基本的に受験生レベルの古文知識で作れる簡単な訳になっている。ほかの項目を読み終えたあとの復習に使おう。

解答

問一 a 後白河院 b 乙前 c 乙前

問二 ① いくらなんでも乙前の体調が急変することはあるまいと思っ
ていたうちに、じきに重態になったことを告げてきたので② 乙前の年齢はその死を惜しむのにふさわしい年齢ではないけれ
ども、彼女とは（今様の師匠として）何年もの間、親しく交わっ
ていたので、私のしみじみとした悲しみはこの上なく③ 私が実際に乙前のために今様を歌っていたことを語って、私も女
房たちも、みなしみじみ素晴らしいと感じ合っていた。問三 病気の乙前を見舞った際に、乙前が、自分が歌って聞かせた今様を
経よりもありがたがったことを思い出して、病床にあっても今様を愛
し続けた乙前を師として尊敬し、今様によって彼女の来世の安楽を願
う心情。（97字）問四 乙前の一周忌に、後世の弔いとして、後白河院が乙前に習ったいくつ
かの主要な今様の曲を歌ったという事情。（50字）問五 はじめの句 法住寺の
おわりの句 うれしき

本文読解

前書きの読解

今回の前書きから読み取るべきは、「後白河院と乙前が今様の師弟関係に
あること」「院の一人称視点から書かれた文章なので、院自身に対しては地
の文で尊敬表現が用いられないこと」の二点である。

前者は前書きにはつきりと書かれている。登場人物間の関係は本文からだ

けでは把握できないこともあるので、前書きや【注】を利用して整理する必
要がある。

後者については、「後白河院が歌謡の芸道を習い極めるまでを回想した」
という部分から判断することになる。随筆・日記文学を読む際には、「誰が
書き手であるか」によって、誰に、どの種類の敬語が用いられるかが異なる
のを忘れてはならない。

通読

第1段落第1行「乙前、八十よりしかば、」

◎「別の事」は「格別のこと」「特別なこと」などと補って読む。「たいした
こと」くらいの意味だろう。

第1段落第1行〜第2行「さりともとくたりしに、」

◎「さりとも」のあとに何が省略されているかは、少し考えて判断する必要
がある。後回しにしてこの段落を読み終えてから解くことにする。

第1段落第2行〜第4行「近く家をつゝうなづく。」

◎院が乙前を見舞う場面だ。傍線部があるが、主語特定の問題なのでここだ
けで解ける。答えてしまおう。

◎接続助詞を介した主語の切り替わりが多い。少し注意して読み進めよう。
★一文の中で主語が何度も移る文章を読むのが苦手な人は、主語が変わる部
分に「／」を入れながら読み進めるとよい。

第1段落第5行〜第6行「像法転じて〜とぞいふ」

◎院が乙前に聞かせた歌。「万づの病なし」とあるから病気の回復を願った

ものだろう。

第1段落第7行～第8行「二三反ばかり帰りにき。」

◎傍線部があるが、これも主語特定の問題。簡単に解答できそう。

第2段落第1行「そのち、きしかば、」

◎「かくれ」てしまったのは当然患っていた乙前だろう。

第2段落第1行～第2行「惜しむべききりなく、」

◎現代語訳問題。ほとんど直訳ですみそう。解いてしまおう。

第2段落第2行～第3行「世のはかなくけられて、」

◎「世」は「①現世②俗世③男女の仲」を意味するが、ここでは人が生き死にする「現世」のことだろう。

第2段落第3行～第4行「多く歌習ひくめ祈りき。」

◎難しげな漢語が並ぶが、個々の意味にはこだわらない。院が乙前のために経を読んでいることだけおさえる。

◎「やがて申し上げて後に」誰に何を申し上げたのかよくわからない。傍線部もないので、とりあえず読みとばす。

第2段落第4行～第5行「一年があひくと思ひて、」

◎院が乙前のために経を読む描写の続き。

◎傍線部が意識しているのは第1段落で語った見舞いのときの一件だろう。文字数・内容ともに負担の大きい問なので、解くのは後回しにする。

第2段落第5行～第7行「あれに習ひくに甲ひき。」

◎傍線部の想起を受けて、経の代わりに今様の歌で乙前を甲っているだろう。歌の名前は気にせず読みとばす。

第2段落第7行「それをも知りみる様は、」

◎傍線部中「それ」が指すのはふつうに考えれば直前の「院が乙前を経・今様で甲った」という内容。ここまでの内容から簡単に解けそうなので、解答してしまおう。

◎問五で女房の見た「夢」の範囲が問われている。ちょっと注意して読み進める。

第2段落第7行「法住寺の広くひけるを、」

◎この「我」は視点人物の院自身のことだろう。

第2段落第7行～第8行「五条の尼、くたるとて、」

◎「五条の尼」は、注より「乙前」のこと。すでに故人である乙前が夢に現れたようだ。

第2段落第8行～第10行「世に賞でて」とみて、」

◎長い一文がひたすら助詞「て」でつながれている。「て」の前後では主語が変わりにくいことを考えると、主語はずっと「乙前」のままだろう。

◎「我も目付けて」がちょっとわかりにくい。この「我」は誰のことだろうか。前後で主語が変わった様子もないので、やはり乙前を指すのだろう。

◎傍線部があるが、簡単な主語特定の問題。答えてしまおう。

◎「おぼつかなし」は「①はつきりしない②気掛かりだ・待ち遠しい」だが、弟子である院の歌う長歌の出来を「気掛かり」に思っていたということだろう。

◎「身も涼しく」の意味はよくわからないが、設問にかかわる箇所ではないのでこだわらない。

◎女房が見たという夢の内容はだいたいこのあたりで終わるようだ。

第2段落第10行～第11行「両三日ありけるにや。」

★「両三日」は「二、三日」の意味。

◎「さは聞きにけるにや」主語は誰か、「さ」が何を指すのかがすぐには読み取れない。設問にかかわらない限り深入りしないほうがよい一文と判断して、読みとばす。

第2段落第11行～第12行「しかじかあゝ弔ふなり。」

◎傍線部は単語・文法の面からいえば難しい一文ではない。「しかじか」の指す内容が焦点となっているのだろう。

★本文は全体的に非常に読みやすい。いくつかの単語・表現を抜きにすれば、現代文同然に読み進められたはずだ。このような「やさしい文章十骨のある記述問題」のパターンで出題されたときは、ひとまず本文をざっくり読み終え、残した設問にじっくり取り組む時間を確保する。

設問解説

問一

解答 a 後白河院 b 乙前 c 乙前

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 文法

解説

a

傍線部を含む一文の主語の変化を、接続助詞を目印にして追う。

まず、文頭「弱げにみえしかば」の主語は、病気を患っている乙前である。接続助詞「ば」で主語が変わりやすいので、続く「結縁のためにくいひしかば」の主語は別の人物と判断。本文は「後白河院」の視点から書かれた文章なので、主語の記述が特にない動作の主語は後白河院である。最後に再び接続助詞「ば」で主語が変わるが、ここの主語が「歌や聞かむと思ふ」と問われた人物、つまり乙前であることは明らかだろう。

b

傍線部を直訳すると、「これをつけたまわりますことで、きっと命も続くでしょう」となる。「これ」は直前の後白河院による歌を指す。現在この場面に居合わせている人物で、院の今様をありがたがるのは、病床の身を見舞いに来てもらっている「乙前」である。

c

傍線部cを直訳すると、「足柄など、いつもと違います。この歌の素晴らしいこと」となる。これは、ある人物が別の人物の歌を聞いて、その出来栄を褒めている発言である。

傍線部cは、丹波という女房の見た夢の中における発言である。この夢に登場するのは、「後白河院」と「乙前」の二人である（ここで、この夢を見た女房自身も夢の中に現れていると考えてもよい。しかし、夢の中における

彼女の言動は描写されていないので、本問にはかかわらない。

これを踏まえて傍線部。の一文目に注目する。の発言主は、相手の歌の出来が「普段と比べて」よいという褒め方をしている。この二人のうち「いつもよりも歌の出来がよい」と相手の今様を評価する立場にあるのは、当然今様の師匠であり院に稽古をつけてきた「乙前」である。

問二

解答

《合格答案》

- ① いくらなんでもと思っていたうちに、じきに乙前が重態になったことを告げてきたので
- ② 乙前の年齢はその死を惜しむのにふさわしい年齢ではないけれども、何年もの間、親しく交わっていたので、しみじみとした悲しみはこの上なく
- ③ 私が実際に乙前のために今様を歌っていたことを語って、私も女房たちもしみじみ素晴らしいと感じ合った。

《満点答案》

- ① いくらなんでも乙前の体調が急変することはあるまいと思っていたうちに、じきに重態になったことを告げてきたので
- ② 乙前の年齢はその死を惜しむのにふさわしい年齢ではないけれども、彼女とは(今様の師匠として)何年もの間、親しく交わっていたので、私のしみじみとした悲しみはこの上なく
- ③ 私が実際に乙前のために今様を歌っていたことを語って、私も女房たちもしみじみ素晴らしいと感じ合っていた。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

- ① ① まず、品詞分解をしたうえで逐語訳する。

さりとも／と／思ひ／し／ほど／に、ほどなく／大事に／なり／に／たる／由／告げたり／し／に

「さりとも」は「いくらなんでも・そうはいっても」などと訳す重要表現。「ほど」は時間・空間・間柄に関することがらを表す抽象名詞だが、ここでは時間を表す。「大事」は古文に特有の表現というわけではないが、このままだと意味がはっきりしないので別の言葉に置き換える。文脈から「体調の悪化」を指すと判断。「由」は多義語名詞であり、「由緒・理由・方法・風情・事情」と幅広い意味をもつ。ここでは特に意味を限定する根拠がないので、「事情」の意で訳す。これらを踏まえると、直訳は、「いくらなんでもと思っていたうちに、じきに重態になったことを告げてきたので」となる。しかし、これでは解答欄が大きく余るので、省略して書かれている「さりともと思ひし」の内容を具体化して解答に加える。

「さりとも」＝「いくらなんでも」は、困難な状況や苦しい状況の中で希望を見いだす表現である。今回の場合、「乙前が病気である状況」が困難な状況にあたるのは一読して理解できる。すると、「さりとも」という見いだされる希望は、「乙前の病状が悪化しないこと」と考えられるだろう。このことは、傍線部直前の記述「いまだ強々しかりしにあはせて、別の事もなかりしかば」という条件とも適合する。

あとは解答欄の大きさに合わせて、より重要である、筆者の考え(「乙前

の病気はひどいことにはならない」のほうのみを解答に盛り込む。

②

まず、品詞分解をしたうえで逐語訳する。

惜しむべき/よはひ/に/は/なけれど、年ごろ/見馴れ/し/に、あはれさ/か
ぎりなく

「よはひ」は「年齢」、「年ごろ」は「長年」の意。「あはれさ」は何かしらのしみじみとした感情を表す言葉だが、ここでは師匠である乙前の死に対する「しみじみとした悲しみ」と捉えるのが自然。「見馴る」は「親しく交わる」ことを表す古文単語だが、文脈や字面から判断できるのでわざわざ覚える必要はない。「惜しむべき」の「べき」は「惜しむ」が三人称主語でありかつ「なけれど」で打消されているので、可能または当然で訳す。これらを踏まえると、直訳は「惜しむのにふさわしい年齢ではないけれども、何年もの間、親しく交わっていたので、しみじみとした悲しみはこの上なく、」となる(ここでは「べき」を当然で訳している)。

しかし、①と同様、これだけだと解答欄が余るので、いくつかの要素を加える。本文から読み取れる範囲であれば、年齢とは誰の年齢のことか、誰と誰が親しく交わっていたのか、誰が悲しみを感じているのか、などの要素を補う必要がある。

③

まず、品詞分解をしたうえで逐語訳を試みる。

しかじか/あり/し/由/を/語り/て、我/と/女房たち/も/あはれがり/あひ/た
り/き。

「しかじか」が指すのは直前までの内容、すなわち「乙前の一周忌に、院が今様を歌ったこと」「ある女房(丹波)の夢に現れた乙前が院の歌を賞賛したこと」などである。「由」は「ここで単に」「こと」と訳す。「あはれがる」は「感心する・同情する・嘆き悲しがる」などの意味をもつ古語。「あはれなり」からおよその意味は想像がつくはずだ。この文において「あはれがる」がどのような意味で用いられているかは、語られた話の内容すなわち「しかじかありし由」を根拠に判断する必要がある。

そこで、「しかじか」の指す内容をより詳細に考えていく。ここで、「しかじかありし由」の直後の「かたりて」の主語の捉え方によって、「しかじか」の整理の仕方も変わることには注意する。「かたりて」の主語が誰であるかについては、次の二通りの考え方が成り立つ。

一つ目は、「かたりて」は「後白河院」のみを主語とし、語られた内容も院の経験したことがらに限られるという考え方である。この考え方にそって「しかじかありし由」の内容を補うならば、先の二つの要素を「乙前の一周忌に、院が今様を歌ったこと」を中心にとめることになる。

二つ目は、「かたりて」は「あはれがる」と同じく「後白河院」および「女房たち」を主語とし、院・丹波の双方が経験したことがらにふれているとする考え方である。この立場によれば、「乙前の一周忌に、院が今様を歌ったこと」、「ある女房の夢に現れた乙前が院の歌を賞賛したこと」の二つの要素を、その関係がわかるような形でまとめることになる。

最後に、残しておいた「あはれがる」の解釈に戻る。ここは「かたりて」を右で説明したどちらの仕方で解釈するかによらず、「しみじみ心が動かさ

れる」「しみじみ素晴らしいと感じる」といった意味になる。結局のところ、院たちが「あはれが」っているのは、「院が乙前の供養に歌った今様を、夢の中によみがえった乙前が褒めた」という出来事である。この出来事から伝わるのは、乙前の今様への愛の深さや院と乙前の師弟としての結びつきの強さであり、それは感動の対象にふさわしいものである。

《満点答案》は「かたりて」の主語を「後白河院」のみと考えた場合のものである。「後白河院」と「女房たち」を主語とみなす後者の解釈にもとづけば、「私と女房達は、私が乙前を供養した夜、乙前が女房の夢に現れたことを語り、みなしみじみ素晴らしいと感じ合っていた」といった解答になる。

問三

解答

《合格答案》

病気の乙前を見舞った際に、乙前が、自分の歌って聞かせた今様を読経よりもありがたがったことを思い出して、病床にあっても今様を愛し続けた乙前を師として尊敬する心情。(80字)

《満点答案》

病気の乙前を見舞った際に、乙前が、自分が歌って聞かせた今様を読経よりもありがたがったことを思い出して、病床にあっても今様を愛し続けた乙前を師として尊敬し、今様によって彼女の来世の安楽を願う心情。

(97字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明 (要約型)

解説

文字数も多く手ごわい問題であるが、冷静に処理していく。

まず「歌をこそ経よりも賞でしか」と院が思い出しているのは、本文前半で描かれる一件のことである。この場面で、院は病床の乙前を見舞い経と今様とを聞かせる。すると乙前は、「経よりも賞でいりて、『これをうけたまはり候ひて、命も生き候ひぬらん』と院の読経よりも院の今様に感激した子どもの反応を返す。当然、解答はこのやりとりを踏まえたものになる。

この一件が示すのは、今様に懸ける乙前の思いの深さである。ふつう、病床にある人物が読経よりも今様をありがたがるなどということはあり得ない。乙前が今様を深く愛していたからこそ、病の身にありながらも、今様が読経よりも素晴らしいものに聞こえたということがまず読み取れる。

次に、この一件が院の乙前に対する感情に与えた影響を考えていく。院と乙前は今様の弟子と師匠という関係にある。弟子である院の視点からすると、師である乙前が病床にあっても経より今様を賞美したことで、彼女の今様への思いの深さを思い知ったことになる。すると当然、弟子である院としてはいっそう師匠の乙前への尊敬の念を強くしたにちがいない。

また、院がこの一件を思い出したのが乙前の後世を弔う一周忌の日のことであるというのも重要な点である。彼女を弔うのにふさわしい方法を考えるうちにこの記憶が院の脳裏によみがえった。とすると、この記憶には乙前の来世の安楽を願う心情が結びついていると考えられる。このことも解答に盛り込む。

問四

解答

《合格答案》

乙前の一周年忌に、後世の弔いとして、後白河院がいくつかの今様の曲を歌

ったという事情。(41字)

《満点答案》

乙前の一周忌に、後世の弔いとして、後白河院が乙前に習ったいくつかの

主要な今様の曲を歌ったという事情。(50字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明(指示語説明型)

解説

指示語の内容をおさえるだけの非常に単純な問題である。

「それをも知らで」のあとには「丹波という女房が、院の歌う今様を乙前が賞賛するという夢を見た」という内容が続く。このような内容の直前に、「それをも知らで」とわざわざ書くということが意味するのは、もし丹波が「それ」を知っていたとすれば、丹波の見た夢の意味が変わるということである。

そのような考えを念頭において本文をさかのぼると、傍線部の直前では「乙前の一周忌に院が今様を歌った」ことが語られており、このことは丹波の見た夢と内容的に符合する。そこで、「それ」に「乙前の一周忌に院が今様を歌ったこと」を代入して考えてみる。院が乙前に今様を捧げたことを丹波が知っていたとしたら、彼女は単に、院の話に影響を受けてあのような夢を見たにすぎないとも考えられる。しかし、現実には、丹波は院が今様を歌ったことを知らないにもかかわらず、院の今様を乙前が賞賛する夢を見たのである。これは常識的には起こり得ない出来事であり、大きな意味をもつ。よって、「乙前の一周忌に院が今様を歌ったこと」は、丹波がそれを知っていたか否かで彼女の見た夢の意味が大きく変わる事情であるといえる。あとは解答欄に合うように、「乙前の後世の弔いを目的とすること」「乙前に習った今様であること」といった要素を加える。

問五

解答 はじめの句 法住寺の

おわりの句 うれしき

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 指示語説明

解説

どこからどこまでが丹波の女房が見た夢の内容であるかを考える問題である。本文中、夢と現実の内容を区別する手掛かりは二種類あり、一つは内容であり、もう一つは表現である。

まず、前者の内容の面から考えていく。傍線部直後に「法住寺の広所」という単語が登場し、以降の内容はしばらくこの場所で展開される。しかし、傍線部の直前にあるとおり、この夢を見た女房は現実には「里にある」のであって、実際に「法住寺」に居合わせているわけではない。このことから、「法住寺」以降の内容は、夢の中での出来事とわかる。これで「どこからが夢の内容であるか」が判明した。

次に、後者の手掛かりである、表現に目を向ける。「夢」に関することを表現する動詞としては「見る」「覚める」などが思い浮かぶだろう。そこで、これらの単語に注意して本文を読み進めると、「画三日ありて」の前後に、「〜と見て」、「かく見えつる由を」と、「二カ所「見る」が現れる。

最後に、再び内容の面から考える。「画三日ありて」が表す時間の経過は現実におけるものか、夢の中でのものなのか。「画三日ありて」のちに起きた出来事は、「かく見えつる由を、女房参りて申す」。つまり、「この女房が院のもとを訪れて、夢の内容を語った」のである。これは明らかに現実の出来事。そこで、もう一方の「見る」に目を向ける。その直前にある発言「これは〜うれしき」は乙前によるものであり、これは「死者である乙前が現れ

た」という夢の内容と連続する。よって夢の内容としては、「両三日ありて」の直前、『うれしき』と見て「のうれしき」までが含まれる。

本文解説

現代語訳

乙前が八十四歳であった春、病気になるていたけれども、まだしっかりしていたことに加えて、格別（体調が悪いよう）なこともなかったので、いくらなんでも思っていたうちに、じきに重態になったことを告げてきたので、近くに家をつくって住まわせておいたので、じきじきに人目を忍んで行ってみると、（乙前が）娘に抱き起こされて、向かい合って座った。弱々しく見えたので、仏法に縁を結ぶために、法華経一巻を誦読して聞かせたあとに、「歌を聞きたいと思つか」と言ったところ、（乙前は）喜んですぐにならずに、

像法転じては 薬師の誓ひぞ頼もしき

一度御名を聞く人は 万づの病なしとぞいふ

二、三回ほど歌って聞かせたのを、（乙前が）経よりも賞美して、「これを聞かせていただきますことで、きっと命も続くでしょう」と、手をすり合わせて泣き泣き喜んだ様子が、しみじみと尊く思われて帰ってきた。

その後、仁和寺の理趣三昧に参っておりましたときに、二月十九日にもう亡くなったことを聞いたので、惜しむのにふさわしい年齢ではないけれども、何年もの間、親しく交わっていたので、しみじみとした悲しみはこの上なく、世のはかなさや、先立たれたり先に亡くなったりするこの世の有様が、今

に始まったことではないが、思い続けられて、多くの歌を習った師であったので、（乙前臨終の知らせを）聞いたすぐその時から（供養を）始めて、朝には法華懺法を誦読して六根の罪障を懺悔し、夕方には阿弥陀経を読んで、西方極楽浄土への九品往生を祈ることを五十日間勤め、祈願した。一年の間、千部の法華経を誦読し終えて、次の年の二月十九日に、（一周忌の追善であることを）すぐさま仏に申し上げたあとで、法華経一部を誦読したのち、歌を経よりも好んだと思って、かの者（乙前）に習った今様の主要なものを歌ったあと、夜明けに足柄十首・黒鳥子・伊地古・旧河などを歌い、最後に長歌を歌って、後世の弔いをした。このことを知らずに、里にいた女房の丹波が、夢に見たことには、法住寺の大広間で、私（乙院）が歌を歌っていたのを、五条の尼が白い薄衣に足を包んで参上して、障子の中にいて、向かい合って、「この御歌を聞きに参った」と言って、まことに賞美して、自分（乙前）も注意して歌い、「足柄など、いつもと違います（乙院もいつも素晴らしいです）。この節回しの素晴らしいこと」と褒めちぎって、長歌を聞いて、「これはどうかと心もとなく思っていました、素晴らしいことよ。これをうけたまわりましたので、体もさっぱりして、うれしい」と（言ったと）夢に見て、二、三日たって、このように夢を見ましたことを、その女房が私の所へ参上して申し上げた。（乙前は私の歌を）そう（乙院の夢のように）聞いたのであろうか。このようなことがあったと語って、私も女房たちもみなしみじみ素晴らしいと感じあった。その後、その日（乙前の命日）には、必ず今様を歌って後世を弔うのである。

用語解説

さりともしも そうはいっても・いくらなんでも

よし【由】 ①由緒②理由③方法④風情⑤事情

しのぶ【忍ぶ】「他バ四・上二」 ①人目を避ける②こらえる

ゐる【居る】「自フ上二」 ①座る・いる②(補助動詞として)くし続ける

めづ【賞つ】「他タ下二」 ①褒める・賞美する②愛する

うけたまはる「他フ四」 お受けする・お聞きする

あはれなり 心を動かされる

かくる【隠る】「自フ下二」 ①亡くなる②人目を避ける・隠れる

年ごろ 長年・数年来

おくる【後る】「自フ下二」 ①あとに残る②人に先立たれる

やがて すぐに・そのまま

果て 最後・終わり

ごせ【後世】 ①死後の世界・来世②死後の安楽

よに【世に】 実に

おぼつかなし ①はっきりしない②不審だ③気掛かりだ・待ち遠しい

(上岡公聖、市川裕圭、山崎恭子)

2016年度 名古屋大学 前期 国語

Ⅲ 漢文（道家の思想）

難易度	所要時間	出典	傾向と対策
★★★★☆	30分	<p>帰有光『張雄字説』からの出題。帰有光は王世貞と並んで明代散文作家の代表者とされ、身辺の雑事を繊細かつ叙情的に描いた散文が高く評価された。嘉靖十九年（一五四〇年）、挙人に及第。以後、会試に落第し続け、嘉定（上海市内の地名）の安亭江畔で学問教育の生活を送り、同四十四年に六十歳で進士に及第した遅咲きの科挙官僚である。本文は張雄という人物に作者があざなをつけた話であり、その際に老子の教えを引用している。本文に記述はないが、張雄という名前から「其の雄を知りて」の一節を連想したのではないかと推察される。</p>	<p>本文は235字で、2015年度よりも減少しているが、抽象的な概念が登場するので全体を通して読解が難しかったのではないだろうか。老子の教えを中心に論を展開しているため、老子の思想がどういった傾向のものかを何となくでもイメージでもっている人は、文章の内容を感覚的に理解しやすかったかもしれない。</p> <p>しかし、感覚的に本文を理解できたとしても、設問に解答</p>

傾向と対策
<p>するためには本文中の抽象的な概念や表現を咀嚼して文脈に即した訳や説明を丁寧に書いていく必要がある。</p> <p>問二では、対比関係から傍線部の内容が「敢て人に勝らざるの心」と対の意味になる、というところまでは多くの受験生が気づけただろう。しかし、どのような表現を用いて「勝」の内容を具体的に説明しようかというところで悩んだかもしれない。問三でも「加」の意味内容を説明する際に、この字を用いた適当な熟語を思いつくのが難しいため、文脈から類推した言葉のイメージをそれらしい表現で言語化するのに苦労するところだろう。</p> <p>問六では本文を通して繰り返し登場する「天下の谿」「雄を知る」「雌を守る」「柔を致す」といった抽象的な概念を具体的に説明していかないと、何を言っているのかさっぱりわからない解答ができあがってしまうだろう。</p> <p>こうした問題の場合、文章理解を感覚的なイメージの構築だけで済ませて何となくの感覚で解答をまとめてしまうと、本文中に登場する抽象的表現を羅列しているだけの中身の無い文章になりかねない。読解をしながら抽象的でありづらい表現に出くわしたら、そのたびに「つまり、それはどういうことなのか？」と疑問を投げかけ、文脈に即しつつも自分なりに深く切り込んで解釈する姿勢が大事である。文脈を正しくおさえられていれば、やや突っ込んだ表現を用いても、大きく解釈がずれることはない。まずは自分の</p>

傾向と対策

解答を読んでみて、本文を読んだことのない人でも理解できる文章かどうかを客観的な視点からチェックしてみるところから訓練するとよいだろう。

《この解説の使い方》

本文読解

「通読」からなる。「通読」は教科書や辞書が使えない状態を想定した、試験場での読み方である。一読で内容を把握できる人がどのように本文を読んでいるかをたどり、自分の読み方を見直そう。一読しておおよその意味がつかめる人の読み(◎)、ワランク上の読み(☆)、脳内で把握された内容(▼)を適宜載せてある。

設問解説

設問ごとに、どのように解答を導くか詳細に解説した。また、関連知識も掲載している。

本文解説

「書き下し」「現代語訳」「要旨」からなる。本文を読むのに時間がかかってしまう人は、「書き下し」を音読して漢文独特のリズムに慣れるとよい。

なお、作者名・作品名(作品名を書き下す場合を除く)のふりがなは現代仮名遣い、それ以外のふりがなは歴史的仮名遣いを用いている。

解答

問一 a すでに b とき c つひに「つひに」

問二 他人よりも優れた人物が抱きやすい、自分は他人よりも優れているのだという優越感。

問三 才智があればあるほど、いっそう他人より優位に立とうとする振る舞いがひどくなっていく。

問四 ゆえに才智のない人たちは常に勝てないということになり、才智のある人たちに反抗しようとする。

問五 雌を守る能はざれば「ずんば」、天下の谿と為る能はず、以て雄を天下に称するに足らず。

問六 男らしく、人一倍優れた人物であるために才智を身につける努力を怠らず、それでいて謙虚さを保って決して人を見下したり打ち負かさうとしたりしない女らしい柔和さをもつことで、おのずと徳が備わり、人々の反感を買うこともなくまるで水が谷に集まるかのように多くの人に愛される、頼りがいのある人物になってほしい。(148字)

本文読解

通読

張雄、既冠たりて、字を余に請ふ。

◎「冠」は【語注】より「成人になる」という意味。「余」は一人称で、作者のことを指しているのだろう。

▼張雄という人がいて成人になったから私にあざなをつけてほしいと頼んだ。

◎字は成人男子が本名と別につける呼称だったな。

余、辱くも賣と為り、以て辞すべからず、之に字して子谿と曰ふ。

◎「辞す」は「断る」の意味か。「辞すべからず」だから断れなかったんだね。

▼私は張雄の願いを断れず、名付け親になって子谿というあざなをあたえた。

◎「子谿」とはいったいどんな意味をもった名前なんだろう？

之を聞くに老子に云ふ、

◎「老子」は【語注】より書名とある。老子という人物が書いたとされるが伝説上の人物なんだっけ。

▼『老子』にある言葉を参照してあざなをつけた。

其の雄を知りて、其の雌を守れば、天下の谿と為る。常德離れず、嬰兒に復帰すと。

◎雄を知る、雌を守る、「天下の谿」になる、ってどういうことだろう。

赤ん坊に帰帰するってどういう状態なのだろうか？

▼雄を知って雌を守れば天下の谿になれる。徳が離れることはなく、赤ん坊のような状態に立ち戻る。

◎オス、メスのことを言っているわけではさすがになさそうだな。何かの比喩だろう、もう少し読み進めてみよう。

此の言人に勝るの徳有りて、之を操るに敢て人に勝らざるの心を以てすれば、徳天下の上に処り、礼天下の下に居る。

◎徳をもっていても優越感をもたない謙虚な人が真の人徳者だ、みたいなことを言っているのかな？

▼この言葉が言っているところは、人に勝る徳をもっていても人より上だと思わない心であれば、その人の徳は天下の上に、礼は天下の下になる、ということだ。

◎「礼」が天下より下ってどういうことだろう？

☆老子の思想では、「礼」をもてはやす人は他人にもそれを押しつけてしまつてよくない、と考えられているから（参考【参照】、本当に徳がある人こそ「礼」を重んじる心が強くないということなのだろう。

谿の能く受けて水之に帰するが、若なり。

◎前文にあるような人物を谷にたとえているらしい。流れ込む水をすべて受け止めているようなイメージかな。「能く」は「〜できる」で、「若」は「〜とシ」と読んで「〜のようだ」という意味になるやつだな。

▼そんな徳のある人はまるで谿のように雨水をすべて受け止めて集めることができるのと同じようだ。

◎【語注】より「谿」は谷のことで、これが「子谿」という名前につながっているんだな。

其の常德を失わずして嬰兒に復帰す。

◎赤ん坊のような状態ってよくわからないけど、生まれてきたときのような純粋な心をもっているってことかな。

☆谷が水を集めていくことと絡めると、自然と人が集まり愛されているよな、そんな存在になるってことじゃないかな、純粋な心をもっているがゆえに。

「人己之勝心生ぜざれば、則ち柔を致すの極なり。」

◎傍線部はどう読むんだろう？ 内容的には「敢て人に勝らざるの心を以てすれば」と類似するのだろう。

▼ひたすらに他人に勝ろうとする心からおごりたかぶって他人にとがった

態度をとるようなことをしないのは、柔軟な姿勢だ。

人天地の間に居りて、其れ才智や人に異なれば、常に愚不肖に加ふるの心有り。

◎「ここでの「異」は単に異なるという意味ではなくて、人と違って優れている、みたいな意味か。天才のことを「異才」とも言ったりするしね。

▼優秀な人ほど才智のない人に対して「加ふる」心をもっている。

◎「加ふる」は「ここではどういう意味だろう？」

²其れ才智 弥 大なれば、其れ加ふること弥甚し。

▼才智が大きくなるほど、「加ふる」ことがますます甚だしくなる。

◎賢ければ賢いほど、人より優位に立ちたいという欲は増すものだし、「加ふる」は他人を上回ろうとするみたいな意味合いか。

³故に愚不肖常に勝らざるに至りて、之に反するを求む。天下の争、愚不肖の勝らざるに始まる。

◎「愚不肖」は【語注】より「才智が優れていない人々」。

▼才智のない人はずっと才智のある人に勝てないから反抗するし、大きな争いや反乱が起こる原因は大抵そこにある。

◎才智のある人は自分たちがより優位になるように世の中を動かしているわけだから、かなわないし反抗したくもなるわけだ。

是を以て古の君子、天下より高き才智有れども退然として敢て以て加ふる所有らず、

◎「是を以て」は「二」三というわけで」。

▼こういうわけで昔の賢い君子は、才智に優れていても決しておごりたかぶらず、謙虚な姿勢で統治を行った。

◎統治者の力が強すぎてかなわないから反乱を起こすしかない、と人民に思わせないために。

天下。卒に勝る莫ければ、則ち其れ柔を致すの極なり。

▼賢い統治者が民衆よりも優位にならないように努めると、争いも起きないし、柔軟な統治といえるのだろう。

然らば則ち雄必ず能く其の雌を守る。

▼男らしさがあるなら女らしさも保てるはずなのだ。

◎男らしい力強さや賢さがある人は、謙虚であれば女らしい柔和さも同時に保てる、ってことかな。

其れ天下の谿と謂ふ。

▼それができれば天下の谿といえるのだ。

◎強くて頼りがいがある、それでいて柔和な人には自然と信頼が集まってくるよね。それを水が集まってくる谷にたとえているのかな。

⁴不能守雌、不能為天下谿、不足以称雄於天下。

◎句点で区切られた三つの箇所はそれぞれ「雌を守ることができない」、「天下の谿となることができない」、「天下の雄を称するには足りない」といった意味になりそうだ。この三つはどういった接続関係で結ぶのがよいだろうか。

▼女らしさを保てなければ「天下の谿」とはなれず、天下の雄を名乗るに及

ばない。

◎ 柔和さを保てないと、尊敬を集めるような優れた人物とはいえない。

設問解説

問一

解答 a すでに b とき c つひに「つひに」

難易度 ★☆☆☆☆

設問パターン 漢字の読み

解説

a 現代語と同じ読みが問われるとは考えにくい。張雄は既に成人し」と訳して文意が通じるので、「すでに」と読むほかないだろう。

b

若には複数の読み方があるので、文全体の構造を考えてみよう。まず、返り点と送り仮名に従って訓読すると、次のようになる。

谿の能く受けて水之に帰するが、若也。

若には「もし」と読んで条件節を導く用法があるが、今回はあとに条件となる内容が続いているわけではないので不適切。

次に、文末の也のここでの用法について考えたい。

① 文の上部に疑問・反語の副詞があるとき

…「や」と読み、疑問・反語を表す。

② 文の上部に疑問・反語の副詞がないとき

…置き字扱いせず「なり」と読み、断定の意味を表す。

ここでは後者であるから、断定の「なり」である。

それを踏まえると、若は活用語の連体形または名詞ということになる。

若は「なんぢ」と読めば名詞であるが、その場合、漢文での語順としては漢文文末の「也」の直前におくのが自然だろう。そこで、帰する、という連体形の動詞から返っているところから、「ことし」と読んで比況の句形をつくることを思い出そう。

つまり文末は、「帰するがことしなり」となる。そして断定の「なり」は活用語の連体形に接続するから、「ことし」は「ことし」と活用させよう。

c

漢文の基本単語であるが読みは頻出である。また、次の漢字は同じ「つひに」という読みであるが意味のニュアンスが異なる。

- 遂 つひに …かくして（原因があつて結果が生じるニュアンス）
- 終 つひに …卒…結局
- 竟 つひに …しかし結局・挙句のはてに

問二

解答 他人よりも優れた人物が抱きやすい、自分は他人よりも優れているのだという優越感。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

傍線部単独では意味がわかりづらいので傍線部を含む一文を分析してみると、「傍線部1」のような心が生じなければ、柔和さ（柔軟さ）の極みである」という。

次に、直前からの文脈を見てみよう。第1段落後半の「此言人々致柔之極矣。」は、『老子』の引用である「知其雄々復帰於嬰兒」に対する作者の解説部分となっている。その解説部分を読み解いていくと、

「人よりも優れた徳をもった人が進んでは人に勝らないようにすれば、世間一般の人たちよりも真に優れた徳の持ち主ということになり、礼（儒教で徳目の一つとされている礼を、『老子』の思想ではマイナスに捉えている）の心は世間一般よりも小さくなる。そのような人物は、溪谷に水が集まるように周囲の尊敬を集める。自らの徳をひけらかすような人物と違って、柔軟に周囲の人たちと付き合える」ということである。

つまり、人より優れた徳をもっていながら「人に勝らざるの心」をもっている人が柔軟な人なのだから、対比関係より「傍線部1」のような心とは簡潔に、人に勝ろうとする心であるとわかる。どんなに人より優れていても、優れていることを人にひけらかして優越感に浸っている人は、人に嫌われてしまうだろう。

問三

解答 才智があればあるほど、いっそう他人より優位に立とうとする振る舞いがひどくなっていく。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

弥やまひのニュアンスを踏まえて大きっぱに訳すと、「才智があればあるほど、『加える』ことができますひどくなる」ということだろう。この「加える」をうまく説明できれば解答は完成する。

直前の一文を見ると、才智のある人は才智のない人に「加える」心があるという。また、問二の「自分は他者よりも優れているのだという優越感」についての言及から話が継続していることも参考にすると、人より優れた才智をもっているほど人に偉そうな態度をとりやすいし、むやみに人より優れた人物であろうとする、ということなのだろう。「加える」の意味に近づけた表現を考えると、「相手をより上回ろうとする」「他人より優位に立とうとする振る舞いをする」といった言い回しが適切である。

問四

解答 ゆえに才智のない人たちは常に勝てないということになり、才智のある人たちに反抗しようとする。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 現代語訳

解説

問三で見たように、才智のある人は才智のない人をいっそう上回ろうとする。よって「之」の示す内容、つまり「才智のない人が常になわなくて、結果としてあらゆる手段で反抗しようとする」対象とは、才智のある人、ということになる。

問五

解答 雌を守る能はざれば「ずんば」、天下の谿と為る能はず、以て雄を天下に称するに足らず。

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 書き下し

解説

返り点に従い、接続を無視して書き下すと、

「雌を守る能はず、天下の谿と為る能はず、以て雄を天下に称するに足らず」となる。「ゝできる」という意味の能ふという動詞に気をつければ、ここまでではそう難しくはないだろう。

傍線部より前を見ると、「男らしさをもっていれば女らしい柔和さを保つことは可能であり、『天下の谿』になれる」という。これを受けて、傍線部の箇所では「しかし、男らしく優れた才智をもっている人が皆、柔和であるわけではなく、女らしい柔和さを保てない人は『天下の谿』とはいえないのだ」ということを言っていると推測できる。

よって、仮定条件の接続を用いて、

「雌を守る能はざれば、天下の谿と為る能はず、ゝ」
もしくは

「雌を守る能はずんば、天下の谿と為る能はず、ゝ」
とするのが正しい。

問六

解答 男らしく、人一倍優れた人物であるために才智を身につける努力を怠らず、それでいて謙虚さを保って決して人を見下したり打ち負かさず、したりしない女らしい柔和さをもつことで、おのずと徳が備わり、人々の反感を買うこともなくまるで水が谷に集まるかのように多くの人に愛される、頼りがいのある人物になってほしい。(148字)

難易度 ★★☆☆☆

設問パターン 内容説明

解説

「子谿」というあざなは、『老子』にある「天下の谿」という表現からとつ

てつけられたものであり、その説明が本文全体で作者によってなされている。つまり解答の骨子となるのは『老子』の引用部分、「男らしさを知ったうえで女らしさを守ること『天下の谿』となつてほしい。真に徳のある人物として(赤ん坊のように)皆に愛される存在であつてほしい」といった内容であり、本文全体を参照してわかりやすくまとめればよい。

まず、女らしさとは、「柔を致す」という表現が本文で繰り返されていることから、端的にいつて柔和な言行に努めることである。さらに具体的な内容としては9行目に「退然として敢て以て加ふる所有らず」とあるように、謙虚で、むやみに人を上回ろうとしないことである。

一方、男らしさについては説明が難しいかもしれないが、第2段落で述べられているように、まずは才智が優れているという点が挙げられる。さらに9・10行目には「天下卒に之に勝る莫ければ、則ち其れ柔を致すの極なり。然らば則ち雄必ず能く其の雌を守る」とある。つまり、「天下の谿」となるには、男らしさも欠かせないのだということである。人は、人一倍優れた才智をもった人物にこそ、つき従いたいと思うものだからである。才智を身につける努力をしたうえで、そのことをおこななければ、人に反抗されることもなく敬慕の対象となりうる。それを「天下の谿」というのである。

また、「谿」の説明として、水が谷に集まってくるように多くの人に愛される人物、といった比喩の内容を解答に盛り込んでおこう。

本文解説

第1段落 張雄の字「子谿」

書き下し

張雄既に冠たりて、字を余に請ふ。余辱くも賈と為り、以て辞

すべからず、則ち之に字して子谿と曰ふ。之を聞くに老子に云ふ、其の雄を知りて、其の雌を守れば、天下の谿と為る。常德離れず、嬰兒に復帰すと。此の言人に人に勝るの徳有りて、之を操るに敢て人に勝らざるの心を以てすれば、徳天下の上に処り、礼天下の下に居る。谿の能く受けて水之に帰するがごときなり。其の常德を失はずして嬰兒に復帰す。人の己が勝る心生ぜざれば、則ち柔を致すの極なり。

現代語訳

張雄は既に成人していたので、あざなをつけてほしいと私に頼んできた。私は恐れ多くも申し出を受け入れ、(張雄の頼みを)断ることができなかった。そうして張雄にあたえたあざなは子谿という。このあざなをつける際に参考にした言葉として『老子』に書いてあることには、「男らしさを知って女らしさを守れば、『天下の谿』となる。そうすれば常の徳は離れることなく、赤ん坊の状態に立ち戻る」と。この言葉が意味するところは、人が他人より優れた徳をもっていたとして、この徳を使ううえで進んでは他人に勝ろうとしない心でいるならば、世間一般よりも格別な徳が身につく、むやみと礼にこだわる卑しい心は世間一般よりも小さなものとなる。それはまさに、谷が雨水を受け入れることができ、水が集まってくるのと同じである。自然と備わっている常の徳を失わずに赤ん坊のような純粋な心に立ち戻るのである。自分が他人よりも優れていることへの慢心が生じなければ、それは柔和さの極みである。

第2段落 「天下の谿」となるための条件

書き下し

人天地の間に居りて、其れ才智稍人に異なれば、常に愚不肖に加ふるの心有り。其れ才智弥大なれば、其れ加ふること弥甚し。故

に愚不肖常に勝らざるに至りて、之に反するを求む。天下の争、愚不肖の勝らざるに始まる。是を以て古の君子、天下より高き才智有れども退然として敢て以て加ふる所有らず、天下卒に之に勝る莫ければ、則ち其れ柔を致すの極なり。然らば則ち雄必ず能く其の雌を守る。是れ天下の谿と謂ふ。雌を守る能はざれば、天下の谿と為る能はず、以て雄を天下に称するに足らず。

現代語訳

人はこの世において、才智が少し他人よりも優れていれば、常に才智のない人たちに比べてより優れようとする心がある。才智があればあるほど、より他人より優位に立とうとする振る舞いがひどくなっていく。ゆえに才智のない人たちは常に(才智のある人たちに)勝てないということになり、才智のある人たちに反抗しようとする。世の中の争いは才智のない人たちが(才智のある人たちに)勝てないということから始まる。こういうわけで、昔の優れた君子は、世の人々よりも優れた才智があっても謙虚な姿勢で、わざわざ人よりさらに優れようとするところはなく、世の中に結局のところこの君子より優れた人物がいなければ、それはつまり柔和さの極みである。そうだとすると、男らしい才智の豊かさがあれば必ず女らしい柔和さを守ることができ、それを「天下の谿」というのである。女らしい柔和さを守ることができなければ、「天下の谿」となることはできず、優れた人物であると名乗るには及ばない。

要旨

作者は『老子』の一節から張雄に「子谿」という字を贈った。才智を身につける努力を怠らない男らしさと、謙虚で人を打ち負かそうとしない女らしい柔和さの両方をもつことで、おのずと徳が備わり多くの人に愛される「天

下の谿」のような人物になってほしい、という思いが込められている。

(133字)

【参考】『老子』の思想

『老子』の思想は「無為自然」を根幹とし、「道」に従ってあるがまま生きることが大切なのだと言っており、儒教で説かれる仁義礼などに対しては形式的なものだとして批判する態度をとっている。今回出題された本文でも、儒教において重視される「礼」をよしとしない態度がうかがえる箇所があったが、それについて直接的に説明し、主張している箇所があるので引用したい。

第38章

上徳、不レ徳トセ、是レ以テ有レリ。
 下徳、不レ失レ徳、是レ以テ無シ。
 上徳、無レ為、而レ無シニ以テ為レニスル。
 下徳、為レ之、而レ有リニ以テ為レニスル。
 上仁、為レ之、而レ無シニ以テ為レニスル。
 下仁、為レ之、而レ有リニ以テ為レニスル。
 上義、為レ之、而レ有ニ以テ為レニスル。
 下義、為レ之、而レ莫ニ之ニ心、則レ攘レ臂、而レ扔レ之。
 故レ失レ道、而レ後レ徳、失レ徳、而レ後レ仁、
 失レ仁、而レ後レ義、失レ義、而レ後レ礼。
 夫レ礼者、忠信之薄、而レ乱之首。

前識者、道之華、而愚之始。
 是以大丈夫、処ニ其厚、不レ居ニ其薄、
 処ニ其実、
 不レ居ニ其華。
 故去レ彼、取レ此。

(現代語訳)

徳が十分に備わっている人間は、徳そのものを意識することがないので徳が離れることはない。徳の少ない人間は、徳を失うまいとするあまりに徳が離れていってしまう。徳が十分に備わった人間は無為を保つことさらに何かをしようとはしない。徳の少ない人間は立派な人間になりたくて善いことをしようとする。例えば仁を重んじる人間は、何か善いことをしようとする。義を重んじる人間は、善いことをしながら自分も褒めてもらおうとする。礼を重んじる人間は、自分がしている善いことを他人にも無理やりやらせようとする。つまり最初に「道」があつて、そのあとに人としての徳があり、徳が失われて仁があり、仁が失われて義があり、義を失った人間がたどり着くのが礼なのだ。特に礼などというものは、人々から真心や信義が失われたあとにつくられたものであつて、これこそが社会を乱すものなのだ。仁や義や礼といったものを知識とかたちで教え込もうとすれば、「道」からはずれた愚か者を生み出すだけだ。だから本当に立派な人間というのは、手厚い真心を大事にして薄情な知識を捨てる。物事の実を大事にして見栄えのよい花を選んだりはいしない。聞こえがよいだ

けの仁義礼といったものを捨てて「道」を選ぶのだ。

(関信成、若杉柊志、松野貴大)